

聖書：ヨハネの黙示録 2：12～17

説教題：わたしの口の剣をもって

日時：2020年12月13日（朝拝）

小アジアの7つの教会に対する主からのメッセージの3番目、ペルガモンの教会へのメッセージを見て行きます。前回も述べましたように、7つの教会の内、最初のエペソと最後のラオディキアの教会は靈的に危機的な状態にありました。またその内側の2番目と6番目、すなわちスミルナ教会とフィラデルフィア教会は、主からの叱責の言葉がなく、主に忠実な教会であったことが分かります。そしてその間の3番目、4番目、5番目の教会は、その中間の教会だと申し上げました。今日からその真ん中の3つの教会を見て行きますが、これらの教会にも程度の違いはあったようです。大雑把に言うと3つの中では今日見るペルガモン教会が最も良く、5番目のサルディスの教会が最も悪かったようです。そのことを頭のどこかに入れておくとか色々整理がしやすいのではないかと思います。

さてそのペルガモンの教会。ここは前回のスミルナよりもさらに北へ80キロメートルほど行った町で、少し内陸に入り、7つの教会では一番北にある町でした。今日の町の名はベルガマです。このペルガモンについて驚くべき言葉があります。それは13節の「そこにはサタンの王座がある」という言葉です。前回スミルナにあるユダヤ人の会堂を指して「サタンの会衆」と言われましたが、それ以上の言葉です。これは何を指しているのでしょうか。このペルガモンは、この地方における異教宗教の中心地だったようです。様々なギリシャ神話の神々を祭る神殿や祭壇がありました。町の北側には小高い丘があって、そこにはゼウスや女神のアテーナー、酒の神ディオニュソスの神殿や祭壇がありました。今日もアクロポリス遺跡として存在しています。また特に有名なのは町の西側にあったアスクレピオスの神殿。これは癒やしの神で、そのトレードマークは蛇でした。これは今日のWHO（世界保健機関）のマークのもとになっているものだそうです。当時も多くの人々がいやしを求めて、このアスクレピオスの神殿に来たようです。ある人は、この蛇が高く祭り上げられていることが、「サタンの王座がある」と言われていることと関係するのではないかと思います。

しかし何と言っても、この町にサタンの王座があると言われているのは、皇帝礼

拝と関係していたと思われます。この町はエペソやスミルナよりも早くローマ皇帝のための神殿が建てられました。そして特にその影響が大きかったことはアンティパスというクリスチャンが殉教したことに現れています。彼はどういう人物だったのか他には出て来ないために分かりませんが、ここで「わたしの確かな証人」と主から言われています。第3版までは「わたしの忠実な証人」と訳されていました。彼はキリストを否定し、ローマ皇帝を「主にして神」と拝むように強要されても屈しませんでした。キリストこそを主とし、信じるという証しを保って生きました。そのために彼は殺されたのです。いかにこの町の上にサタンの力強い働きがあったかが見えて来ます。

しかしそんな中でもペルガモンの教会は固く信仰に立ち続けていました。そのことが主に称賛されています。もし私たちがこの町の教会員で、一人の兄弟が皇帝礼拝を拒否して殉教したならどうでしょうか。同じ信仰に立てば自分が今後どうなるかはすぐに予想されます。そのことを思って浮足立ったとしてもおかしくありません。ところが彼らはアンティパスの殉教を目の当たりにしても、「わたしの名を堅く保った」と主から言われています。また「わたしに対する信仰を捨てなかった」と言われています。サタンの王座があると言われるペルガモン。激しい迫害が始まっているペルガモン。その中でもこの地の教会員は主への信仰にしっかり立っていました。そのことを主は見て、称賛してくださっています。

しかしサタンはこのような形で働いていただけではありませんでした。別の方法でもこの町で働いていました。そしてその攻撃に対する防御という点で、ペルガモン教会にある種の問題があったことが続いて語られます。それは一言で言えば偽りの教えをそのままにしていたことです。14節に「あなたのところに、バラムの教えを頑なに守る者たちがいる」と言われています。全部がそうなのではなく、そういう人々がいる、と言われています。14節の最初でも「あなたには少しばかり責めるべきことがある」と言われています。ですからその誤りに陥っていた人たちは少数だったと思われます。その点でペルガモン教会は、後に続く2つの教会よりはまだ良い状態にありました。ではバラムの教えとは何でしょうか。14節でこう語られています。「バラムはバラクに教えて、偶像に献げたいけにえをイスラエルの子らが食べ、淫らなことを行うように、彼らの前につまずきを置かせた。」ご存知の通り、バラクとバラムの話は民数記 22 章に出て来ます。イスラエルがエジプトを出て荒

野を通過して約束の地に入る前、モアブの地を通る際に、その地の王バラクはバラムを雇ってイスラエルを呪わせようとした。ところがバラムはその意図に反して、神の霊の介入により、イスラエルを呪うどころか反対に祝福してしまいました。しかし後にバラムはバラクからお金をもらいたい下心で、イスラエルに神の呪いが下るように取り計らいます。具体的にはモアブの女たちを送って、イスラエルが異教の神々を拝むように仕向け、また不道德な行いをするように導きます。こうしてイスラエルに神のさばきが下りました。このバラムの話は新約聖書が書かれた当時、とても有名で、彼の名前はペテロの手紙第二やユダの手紙にも出て来ます。

これと同じような動きがペルガモン教会の内部にあったのでしょうか。その人たちはこのペルガモンという異教社会の中で、偶像にささげた肉を食べても構わないと主張したようです。これは偶像にささげられた後、市場に出回るようになった一般の肉のことではありません。これは異教の神々への礼拝や皇帝礼拝に伴う祭儀的食事に参加することです。この町の宗教的な祭りに、人々と一緒になって参加することです。ペルガモン教会の中のある人たちは、それは問題ないのだ！それは許されることだ！と主張し、他の人々も同じ行動を取るように励ましていたのです。おそらくその人々の言い分は、これはジェスチャーに過ぎないということだったのでしよう。周りの人々の宗教を心から信じているわけではない。形だけのことである。いわば自分は社会的義務を果たしているに過ぎない。そこで拝まれている神を本当に信じ、拝んでいるのでない限り、それらに参加することは合法的である！と。こう考える背景には、そうでもしないとこの地でうまくやって行けないということがあったのでしょうか。異教的習慣で満ちているこのペルガモンで、このことを避けていたら、どうやってこの地で生き延びていくことができるかと。そこで彼らは形だけだからと言って、実質的に偶像礼拝的行事に参加し、偶像礼拝の一部である肉を食べるという行為もしたのです。そしてそのような偶像礼拝行為への参加、またそのことへの許容的生き方は、淫らなことと結び付きました。

15 節のニコライ派も似たような立場の人たちだったと考えられます。15 節の初めに「同じように」という言葉があります。この人たちを 14 節のバラムの教えと全く同じと見る人もいますが、多くの方は似た考えを持つ人たちだったのだろうと見ます。このニコライ派については、先の 2 章 6 節で、エペソ教会が、このニコライ派の人々の行いを憎んでいると言われていました。主もまたそうであると。しかし

ペルガモン教会はこれを許容していたのです。その教えを頑なに守る人々はまだ多くはありませんでしたが、そのように主張し、活動する人々が教会の中にいたのです。

そこで主は言われます。16節：「だから、悔い改めなさい」と。注目すべきは、この言葉は偽りの教えを信じている人たちにではなく、教会全体に言われていることです。どういうことでしょうか。これは主はもちろん偽りの教えを信じている少数の人々のことも悲しんでいるけれども、その人々をそのままの状態に放置している大多数のクリスチャンのことも悲しんでいるということです。ですから主は、その人々をそのままに放置する無関心を悔い改めよ！と言っているわけです。自分が信じているわけではないからと言って、その人々を放っておいてはならないと。

そうしないなら、と主は言われます。「わたしはすぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦う」と。「わたしの口の剣をもって」という部分とセットで考えるべきは、最初の12節の「鋭い両刃の剣を持つ方が、こう言われる」という部分です。前回も述べましたように、7つの教会へのメッセージの最初にはキリストがどんな方であるかがまず語られています。そしてそれは1章後半で見た栄光のキリストの姿から取られています。この「鋭い両刃の剣を持つ方」という言葉は、1章16節から取られています。その時も述べましたように、これはもちろん象徴的に取るべきものです。キリストの口から出る御言葉は力強く、まるで剣のようであるという意味です。次の二つの言葉が思い浮かびます。エペソ人への手紙6章17節：「救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。ヘブル人への手紙4章12節：「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。」キリストはこの剣を持って、今すぐにでも戦いに出ようとしておられます。このお姿を私たちは良く仰ぎたいと思うのです。ペルガモン教会はこの状態を放置するのでしょうか。許容し続けるのでしょうか。しかし主は、あなたがたがしないなら、わたしがすぐにでも行くと言っておられます。主の関心は、ただ偽りの教えを守る人たちを正すことにあるわけではありません。背後にあるのはサタンの働きです。ここはサタンの王座があると言われる町です。その戦いのために立ち上がっておられるキリストを仰ぎ、私たちもその方を映し出すように歩まなければならないということです。私たちにとっても戦いのための武器は

御言葉です。御言葉は私たちの心の隠れたはかりごとを暴き出し、私たちに救いの必要を悟らせ、キリストにある救いへ導く神の力です。サタンとの戦いにおける第一の手段です。しかしこの御言葉を拒否する人には、これはさばきをもたらす道具ともなります。この真理の福音をもって、正しい戦いをするようにと主はペルガモン教会をあるべき取り組みへと駆り立てておられるわけです。

最後の17節には勝利を得る者、すなわちキリストのメッセージに従って、この課題を乗り越えて行く者に対する約束が述べられています。大きく2つのことが言われています。一つは「わたしは隠されているマナを与える」ということ。マナはご存知の通り、イスラエルが荒野を旅する間、主が彼らを養うために天から降らせてくださったパンのようなものです。それが「隠されている」とはどういうことでしょうか。ある人はこれは神殿の一番奥の部屋、至聖所にある契約の箱におさめられていたマナのことだと考えます。またある人は、神殿が破壊された時、エレミヤがそのマナを持ち去って隠し、メシヤが到来する時に再び現わすという伝承があって、それを背景にした言葉だと見ます。しかしこのマナが指し示していたのはイエス・キリストご自身でした。ヨハネの福音書6章51節：「わたしは、天から下って来た生けるパンです。」 ですからこれは旧約のマナが指し示していたキリストご自身、またその方による養いを指すと言えます。なお7つの教会へのメッセージについている約束はみな天の御国で与えられる祝福を述べているようですので、その線に沿って考えるなら、これも天においてキリストご自身を豊かに受け取ることを指していると言えるかもしれません。それは一言で永遠のいのちと言っても良いと思いますが、その永遠のいのちが「隠されているマナを与える」という表現で言われているということです。私たちは天の御国で、隠されている本当のマナ、イエス・キリストご自身、その方にあるいのちを豊かに受け取る者となるのです。

もう一つここで言われているのは「白い石」です。これについても多くの解釈があります。白は純粹さ、聖さを表し、天国と関係します。ではその色をした石とは何でしょうか。ある人は裁判の際、判決を下す人が罪ありとの判断を下す場合は黒い石を出し、罪なしとする場合は白い石を出したことに由来するとします。すなわち白い石が与えられるとは神の前で罪なしとされること、罪の赦しを象徴するということです。他の人はこれは公的な宴会場への入場券として当時、白い石が使われたことに基づくとします。その場合は御国に入ることができるためのしるしとなる

ものと言えます。その石には「それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が記されている」とあります。これは何でしょうか。これも色々な解釈がありますが、有力と思われるのは3章12節の御言葉との関連で理解するものです。そこに勝利を得る者を神の神殿の柱とし、その上にキリストご自身の新しい名を書き記すとあります。ですから記される新しい名はキリストの名です。名は体を表すと言われます。古代世界では名を知ることはその人を知ることを意味しました。特に神の名を知るとは、その神の性質や力にあずかることを意味しました。つまりこれはこの石を受け取り、やがての天の御国に入る人のみが、それ以外の人は知らないキリストのさらなるご性質、その栄光を知る者とされるということでしょう。私たちはこの世ですでにキリストの素晴らしさがある意味で知っていますが、御国に入る時はさらにさらに知る。コリント人への手紙第一13章12節：「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。」 私たちが今知っていることはごく一部で、やがての日には完全に知ります。その祝福が、キリストをかの日には新しい名で知るという形で表現されているということです。

そのために私たちに求められていることは、キリストに倣って、今ここでの戦いに励むことです。改めて今朝、心に留めたいのは、サタンの王座があると言われるペルガモンの地で、鋭い両刃の剣をもって今にも出て行こうとしておられるキリストのお姿です。主がそうあられるのに、私たちが勝手に偽りの教えを許容したり、さらにはこの世の異教的習慣と妥協し、心がそうでなければ一緒に参加しても良いとするバラムの教え、ニコライ派の教えを宣伝する人になってはいないでしょうか。自分がそうしないことはもちろんのこと、他にそういう人々がいる場合、それに無関心でいることがないように、それを許容することがないようにとされています。私たちは真理への熱心をもって立ち上がっておられる主のお姿を仰ぎ、この主にならって、私たちも真理の福音をもって戦いに当たる者へ導かれたいと思います。真理の福音こそ、人々の心、思い、罪、隠れた考えを明らかにし、その誤りを示し、人々を救いへ導く言葉です。またサタンの支配を退け、これに打ち勝つための神の武具です。世と妥協する道を進み、いつしかサタンに足をすくわれる歩みではなく、真理のために立ち上がっておられるキリストのご熱心を仰いで、私たちもこの真理を掲げて異教の中で戦う歩みへ進みたいと思います。そしてこの世が与える祝福に

はるかに勝る永遠のいのち、隠されているマナ、そしてキリストの新しい名を豊かに知り、味わう幸いにあずかる歩みへ導かれないと思いません。